

岩手医科大学歯学会第31回例会抄録

日時：平成3年2月23日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. 当科における顎関節症200例の治療成績
—とくにアンケート調査による遠隔成績の検討—

○檀上 達, 佐藤 友美, 小早川隆文
青村 知幸, 加納 良, 土井尻康浩
岩田 信浩, 佐藤 仁, 関 浩二
笹原 健児, 大屋 高德, 工藤 啓吾
藤岡 幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

近年、顎関節症に対し、さまざまな治療法が試みられ、症状の改善あるいは消失がみられるようになった。しかし、治療終了後の症状の再発や初診時とは異なった病状の発症も少なくないといわれている。そこで、今回われわれは1987年～1989年の3年間に当科を受診した顎関節症患者の遠隔成績について検討を加えた。

対象となった顎関節症患者は200例で、症型分類ではⅢ型を主症状とするものが123例（61.5%）と最も多く、Ⅰ型＋Ⅱ型およびⅣ型を主症状とするものが共に38例（19.0%）であった。アンケートの回収率は全体の56.5%（113/200）で、男女別ではそれぞれ50.7%、59.4%であった。

寛解率は75.2%（86/113例）にみられた。なお男女別では男性が76.4%、女性が74.7%と有意差は認められなかった。初診時年齢別では、60歳以上の症例において寛解率が高いものの、29歳以下では低い傾向にあった。また、調査時の無症状率は全体の32.7%（37/113例）に得られ、男女別ではそれぞれ48.5%、26.6%と男性の方が高くなっていた。さらに罹病期間別寛解率は、罹病期間が1ヵ月未満の症例の90%にみられたが、期間が長くなるにつれて低くなる傾向にあった。初診時の症状別寛解例では、疼痛のみで関節雑音や運動障害が認められない症例の91.7%にみられた。一方、雑音や疼痛を伴う雑音症例では、寛解率がそれぞれ60.0%、64.1%と比較的低く、また著明な開口障害を伴う症例においても低い傾向がみられた。

治療法および治療期間別にみた寛解は、薬物療法や理学療法などの対症療法を行い、1年以内に治療が終了した症例の80%以上にみられた。しかし、原因療法まで行い、かつ1年以上の長期間にわたる治療を要した症例では、症状の再発が多くみられた。

このように、アンケートによる遠隔成績は、初診時における経過の予測に役立つものと考えられ、今後これらに対する経過観察と治療法を検討していく必要性のあることが示唆された。

演題2. 進行性筋ジストロフィー症患者の顎関節部と下顎骨形態の関連性について
—X線写真による所見を中心に—

○金野 吉晃, 三浦 廣行, 亀谷 哲也
石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

目的；Duchenne型進行性筋ジストロフィー症患者（DMD患者）は特徴的な顎顔面形態を示すことが知られている。この原因として、成長の早い時期から起こる咀嚼筋の機能低下と舌の肥大が顎骨の成長に影響を与えていると考えられる（木村、石川ら、1981ほか）。この影響は顎関節にも及ぶことが推測され、本研究では下顎骨と顎関節の形態異常について検討した。

資料と方法；岩木病院に入院中のDMD患者8名（平均年齢23歳5ヵ月）を対象とした。対照群として岩手医科大学歯科矯正学講座所蔵の、矯正治療経験のない、比較的健全な咬合の男子12名（平均年齢23歳5ヵ月）を選択した。これらの対象者の頭部X線規格写真および顎関節部をテレダインハノー社製AXライナーで規格化して撮影したX線写真を計測し、overbiteと機能的最大開口量を加えて統計的解析を行なった。顎関節部では、関節窩および下顎頭に6箇所の計測点を設定し、関節頭頸部の前方屈曲度および関節窩の深さを測定した。機能的最大開口量は、最大開口時の上下中切歯間距離にoverbiteを加えた値を用いた。